HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	越野, 剛
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7041号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70607
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Go_Koshino_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　越野　剛

審査委員　主査　教　授　大西郁夫
副査　教　授　瀬名波栄潤
副査　教　授　武田雅哉
副査　名誉教授　望月哲男(北海道大学)

学位論文題名
ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、ドストエフスキーの創作時期に当たる１９世紀ロシアの、病気や病気と結びついた現象（癲癇発作後の朦朧状態を想起させる催眠術やメスメリズム、コレラの流行と暴動や火事の頻発との連想）に焦点を当て、その文化史的変遷を探求する一方で、こうした文化的表象としての病気がドストエフスキーの文学手法の中でいかに変容され、再構築されているかを考察したものであり、文化史研究と文学研究の交錯である点に特色を持つ。

本論文の成果として挙げられるのは主に３点である。

第一に、癲癇や結核、コレラといった病気や、病気に関連する意識瞻妄、現代ではヒステリー性の発作と解釈される悪魔憑きなどの現象は、科学的に明らかにされる実態とは別に、表象やイメージによって認識されてきたという文化構築主義的観点に立ち、１９世紀におけるさまざまな病気の概念や関連するパラダイムを明らかにした点である。この際に本論文で典拠として用いられた資料は多様性に富んでいる。プーシキン等の著名な先行文学はもとより、文学史からすでにこぼれ落ちたマイナー作家、大衆作家の作品、当時の医学文献や科学啓蒙論文、さらには民間伝承や俗信までもが考察の対象となっており、結果として、１９世紀ロシアにおけるこれらの病気や病気から連想されるイメージを具体的かつ説得力のあるものとして提示しており、文化史的な論考としての意義を有している。

第二に、こうした文化史的考察を踏まえて、ドストエフスキー作品における病気の表象が既存イメージの応用と変容であることを論証した点である。例えば結核は、『椿姫』のヒロインと結びついた「薄幸」「夭折」といったロマン主義的イメージがステレオタ

イプ化していた。『白痴』ではこうしたイメージが取り込まれ、健康であるナスターシャ・フィリポヴナにはアイロニーとして、実際の結核患者イッポリートにはパロディとして付与される。また『悪霊』では、作中にコレラがモチーフとして導き入れられ、伝染病と革命思想、ひいては思想そのものの伝播への問いが複雑に重ねられていることが論じられている。こうした考察を通じて、ドストエフスキーの創作手法におけるパロディやアイロニーに内在する、先行概念との「対話」的な特質が明らかにされている。

第三に、文学的手法の分析に基づき、ドストエフスキー文学の特長が示されている点である。ドストエフスキーの作品においては数多くの病人や病的な人物が登場する。本論文では、『主婦』『いやな話』といった短編、『罪と罰』『白痴』、『カラマーゾフの兄弟』といった長編を横断的に分析し、こうした登場人物には矛盾、葛藤する要素が、両義的、アンビバレントなかたちで結びついていることが指摘される。また『カラマーゾフの兄弟』に描かれる悪魔憑きをめぐる言説には、迷信、詐病といった伝統的な解釈と精神疾患とみなす合理的な説明が相矛盾しながら結びついているが、それは近代合理主義の元での信仰の可能性という矛盾を抱えた主題と重なり合っている。ドストエフスキー作品において病気は、単にリアリズム的描写として登場人物に付与されるものというより、矛盾や葛藤を包摂する人間存在のあり方を病気や病人として表象しているとする本論文の見解は、斬新な提言であり、ドストエフスキー文学の特長を、具体的な論証を通じて明らかにしたと言える。

本論文は、こうしたドストエフスキーの創作手法や文学的特長を、作家個人に還元せずに、ロシアにおける西欧文化受容という文化論的問題に再び接続し、西欧に対する劣等感と優越感に揺れるロシア文化の特質にも論が及ぶ。この意味で本論文は文化史と文学研究を往復する複眼的な視野を示したものとなっている。

・学位授与に関する委員会の所見

ただし審査ではいくつかの指摘もあった。分析対象となった病気とはそもそもきわめて広い概念であり、本論文で取り上げられた癲癇、結核、コレラなど以外にも、狂気やハンセン病、性病など、ドストエフスキーの創作は措いても、文化史的に重要な対象は残っており、考察の対象についてなお一層の検討が求められる。またドストエフスキー研究として先行イメージとの関連を論ずるのであれば、病気以外に「ナロード（民族・民衆）」のイメージと彼の唱えた「土壌主義」との関係といった論点も考察の対象となり得る。さらに、病気を示す語彙には一般的表現と医学的専門用語などの別もあり、言語的な面での分析も可能であった等の指摘である。しかしこうした問題は、むしろ本論文の問題設定の的確さを示すものであり、今後一層の展開が期待される部分と考えられ、

本論文の本質的な意義を損なうものではない。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致で、越野剛氏に博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。